



後撰集新抄

凡例  
春上

總論

一





昭和五十一年八月九日 飯島  
重助氏の好意にて求む

估価 壹万参千円

村井 順

中山美石の学識に敬馬く



後撰集新抄序

後撰集といふ一のみさありなり一代の初とも  
よてあまなひのさよとりてよく知ら先きて  
名ある万し紀集又初ん者けるそハ初学の此  
道ふと古此雅ひをんおちらけし志してちえ  
あらぬわさち初ハ初り古のみやひをちてハそ  
れとこひつるんも詞もおのつらうやしく儀を  
ふやゆめさハ此道よ入まむ人は万つよと思ふ





る記をよみおぼしかりかゝるこの集を可き法にすよ  
古今集を大なる家よらまらきえりとの  
られてあまのひしるを此集をそれうらうへ  
よていつれ時意難なわけするよと思ひの亦あ  
るうまのひよりみればはてしなく大なるあ  
なるえらみおてそのうゝ家よれ集おられ何り  
られ忍ぶお志うひみくお志うの心やまあ  
はめてそれ家のよれあしきをもははれいひ

阿つ先おあつ悲うまうる物とんゆるう物学あひのあ  
まよとりてたこれもいと宇新たさいひふおあむ  
あまけるそはそれ万葉集の歌とこれ古の真心  
を志るまよわださるや於那ー定めおたえ  
阿り今古今ハまよと人れ家居の南表のう  
あてよろうるけくみりおるこまーらぬ  
あましく此志あを北のうらおちけうらけん  
安くいひのはまられ葉のぬく於可ーたこも



阿はまなるまの母思ふまゝはあつらひしるまの  
てそは世乃みやひんをさしつるふろ海宇へ  
も此集よけん育ける志あはれとも大あつら  
をりふし此事ふあはてよみいてしるあふて後  
の人乃きわた思ひ志あつらひあめあとい思  
ぬともあれと今世の人のよめるやうふをのこと  
そまゝら福本末うち阿はぬも阿は又よみぬく先  
くも下のんもよみいてしるまの詞を

むけふわきまへつらしたるまゝまゝはあつら  
後新とてハ為家ハ大細玄の抄と香吟法印の八代  
集の抄とさてハ契沖阿きりれきうつ、出くは  
くもとのまていつれも福んは海まきささ  
しる物まあつらへ一わりのものこもあれい  
さうも耳きくもあきぬぬ一まはあつらへ  
まもつるまもあつらへみまもつて此学ひま  
い新てまもあつらへ阿きうめあつらへ海ま



人々吾本於美加ら社乃谷於御道いざわき那  
やむ万して字ひ書みひの保やとけもくは垣路  
の定あまののちやわははる飛や、こおまのうらふ  
おめつらう抽うらうして思ひ那あうさやたものや  
思もくすもあおまのさるもあまらみや飛たつや  
なる抽をやこふおめつらう子中山美石を  
三河の西吉田殿ふ仕へてよろいまめ人なるさ  
つこ路その君よまかしくさ終るもつらうちく

大ああらうけ給らうてこれの道さくをぬん抽する  
おそ事志きた仕とされいも海くよよみ考へま  
海もまよやのあまのなまぬさえの海も志くぬて  
あまよばくくさるるこも海くぬやたこや  
おもあてけふかうも思ひよまうりやわとわ飛あ  
アアおおゆるも控ゆるふ控えれおれ志くし  
友あらまよあまのひら路まおのりもとん毛  
まきくふ忍せてまあまあきほくひつ中ふ



可此おきつまつかつたふしつた三度田度考へ  
 か急し急いみしう心をくつたて物せしれま  
 るふいとまめくしつたふさしふたえさるえうれ  
 むつりしたはつてこれ下道き方ぬるき筆  
 流しひの海はしき飛ことおめくしふ又あきら  
 してみや海本れあわとも志うす申きまぐしつる  
 糸曲かくるき花も咲てた何れとくやまのるえ  
 うめつとよくはつたをしつとくはつたはなるはく

けりつれおめとさうあやしとらちつふらふし  
 今思つはかつて枝さしおもしうた本多ち  
 此き海ふてその世の志つたのふようけしとあきら  
 きておひしつたもほり又さめくしつた道はつた  
 川のはるのめる志なちとすつたう何れやひあ  
 るらむやうふもさも及ひつた秋やもつた  
 ちくちあふつたねと志うほきつしひさ多えつたあ  
 飛とつ功おきしたかくまて物しつたふさつたのふ



あまを思ふふたれまゝふてあゝむちを思ふ  
あまきうこちう世の類人あましく思ふたれまゝ  
早く板ふゑてしての類を思ふひよゝゝ  
可一此類ふも引ひける詞の法あひまといふ  
ふもたわう鈴屋の箱この集のうすふも海このま  
てまつ詞虫の本末あまあゝ思ふるふゝゝ  
ふよあつゝあまきうこちを思ふ物せうれける  
を今かく秘むと海なる伝秘あひて思ふるを

翁世ふあゝと宇ねくか飛ありとこを思ふら  
神めかくて類ひふすり巻ふなるとふゝゝ人の  
みやびんも此やきうこちゝゝ思ふまゝんあ世ふ  
海く比るる何ゆゑと此も思ふやゝゝ思ふての類  
ひつきては君の先々も思ふはかゝゝ世り  
あまきうこちう思ふる色き此やゝゝ思ふる思ふて  
さを思ふあゝあまきうこちう思ふて思ふて  
思ひつゝ思ふるこれやゝゝ思ふて思ふて思ふて



少しも奈らむ又与らこは—あ—やは

文化九年壬申春

本居大平

後撰和歌集新抄

惣論

村上天皇の御時。梨壺の五人子詔して。万葉集をよまとかしめ給ふ  
はいてに。これをよまげしめ給ひ。一条攝政謙徳。もころをいひて。花  
人少将子て。和歌所の列當をよまめ給ひ。古今の後子せんすとて。後  
撰集と名づけさせ給ひ。子より。されどもいふ所の由名に。正しくよ  
びあへずしてやめられらるに。うて。志どけおきこと。もまどれるよ  
し。歌を古き姿子て。よきもの多く。けさみどりか。もきもまどれ  
歌を。古今の撰より。榮花物語の廿余年。古来風抄の廿四。四十年  
にあり。いくやどもなうり。はよき。新得ごとく。すごをば。えは。ま  
ずして。んをされとせられ。まなりなど。いこや。榮花物語。食草



紙などとはけりしつゝよそたるをぞみか引出く下に記せり。ふ  
くそびあへらざりしものとして、四季意籍などこけられ  
ふさゆい古今集とむしとれど、意籍などの歌とえゆるが、四季  
のうちに入るなごもきりくありて、それ次第ツイデもいとみどりか  
けし、よそ人の名れきりしはゆもいふぞやえゆるおともあり、  
あよそ人の名を強ゆるおもあり、それはあませし、詞書にもいとみ  
だわがけし、或は、いふことあるで、詞書を以て、それ意をもと  
むとするに、そころり得ざり、又、源きゆえしありしよと出つし  
とえゆるが、類志にたなひて、さしに、さしに、さしに、さしに、  
およはかまひひことなる、歌の意もむけよをされが、はれきり  
まなるなごもきりしつゝよそたるをぞみか引出く下に記せり。ふ

まなることなごもあへらざりしものとして、他の撰集にこへて、  
いとくみどりかけしきこや多ゆる集よたひあり、志はあれど、  
すてをいも、みさうなる世の風雅フヤビよて、さうてのせれさぎな  
もの、ひてもるごよまはあへらざりしものもめたくいさんか  
きれくえゆる事どもいや多うり、そはまづ、大うし、其をうり、  
るにたれくたにさ名あへぬあまらよいあへら、のさるみやぶんよ  
え、いつはりかざりしことよげかいひたすもなごもいなく、らよあへら  
すちとあられまよいひあききたるあどもに、あれど、今のせに  
て、人情の真を編ヒトコトよまき法よす、まもいよ多く、  
く、詞ハジメが、うなごの、をさへ、再なれぬ、たは、ある、なごも、ま、  
まは、この、み、こ、志、り、ゆ、きたる、よ、い、あ、へ、ら、ざ、り、し、つ、つ、よ、そ、た、る、を、ぞ、み、か、引、出、く、下、に、記、せ、り、ふ、











定ニテ止之云々。仍本無四度計。但證本ハ朱雀院塗籠本。又青表紙云々。  
是ハ範云々として。他者の誤まる論など。あまうれぬ事あり。  
永本也

○後拾遺集序云。村上のかき書代より。又古今和歌集に入らざ  
る。その巻を撰出。後撰集と名づく。又花山の法皇ハ。これの二れ  
集より。ざらあをとりむらひて。拾遺集と名づけ給へり。これの  
集。万葉より。拾遺よ。ち。あとのまねひもの。あつらんを海よりもぬ  
あつらん。

○為家卿抄云。凡古今拾遺を。秋どもいふるひとる集。後撰集ハ。  
よきあれよ。さ。あきあれ。あ。たの。か。記集なりと。先人の中さ  
ま。い。え。

○此集の證本といふもの。袋草紙より。さ。あ。後世ハ。傳。ま。ぬ。な。

登。定家卿の奥書云。天曆五年十月晦日。於昭陽舍撰之。為藏人左  
近少将藤原伊尹別當。寄人。環岐大掾大中臣能宣。河内掾清原元輔。学生  
源順。近江少掾紀時文。抄書所。預坂上望城等也。謂之梨壺五人。又云。貞  
應二年九月二日辛巳。為後代之證本。重書写所傳之家本。悉用所父庭訓。  
為傳嫡孫也。同日。令讀合候。早書入落字。早。戸部尚書藤判。又。此集。  
故者公卿皆書朝臣字。古今此。批把。左大臣哥。戀部。與伊勢贈。書業平名。  
如此事。後代人。或推而直之。是。是非書写誤。此集本說也。不可直改。作者名字  
等。家之本。多相替。皆隨所受之說書之。同哥入。两部。古今哥加入。如。此事  
只隨本云々。又。天福二年三月二日。重以家本。終書功。早。粟門明静と云  
給へ。家本。又。行成大納言自筆の本。小。て。校合して。天福二年四月六日  
校へ。と。かき。て。給へ。家本。も。何。う。な。れ。ど。も。い。づ。れ。も。写。本。子。て。た。



やすく得がごとく。今見及むるを。季吟法師の八代集抄に引かき  
家などによりてあるせり。さて此奥書にも見ゆるおもふきかたも  
よも人の名れをがへ家同く秋の二所に出るなどやうのいさこの  
の誤も古きものと見ゆ。今改むべきにあらば。さりとてなやある  
屋きにもあへぬ。とす。よもあく強へ。此集の事。八雲抄抄。古来  
風船抄。長明法師の無名抄など。その他こきり此書より見るも。ま  
とれふことなきを。今ハあるさ。さて榮花物語。此集の序なきゆゑ  
をいへ家を。季吟法師のいぶらうて。此抄時にも源順などして。野ま  
の奇合の判詞。高産といとくかききり。すなどあれど。なや貫之  
小を及ぶまどくおぼし。免し。るにや。又此集未定まで止む。袋  
單紙にも付ま。序をか。しめ終ふまでにも及むるにや。そかりお

たき事なるべしといをきたるを。さるおとれ見げ。順朝臣八名言き  
人よて。八雲にも順又極古のよ此なりとのふをせし。ばうりなきを。  
此序か。免終ふまで。及むるにや。ハあるまどく思ふるま。序か  
し。免終ふまで。及むるにや。し。

○秋の教も。八雲抄抄。ハ千四百二十首と見え。袋單紙。ハ千三百九  
十六首と見え。今あるハ千四百二十首ありて。其中に。古今集の  
各八首。あとかし。こと二所に出る。秋六首見ゆる。かくて。此千四  
百二十六首まで。二所よいでたる六首を除けば。八雲。ハ千四百二十首  
やあるにまかなへども。なや抄抄のころの本に。同くきやあへば。や  
を。知り。し。又。松菴抄。ハ千四百廿首。或千三百五十六首とあり。千四  
百廿首。抄抄と合ひ。或の方。何まとも。かなを。べ。







ふすちもあるものなれど、大うごちとていへば、されど中にち、其よみ  
いさたるさゆよありて、ゆゑ此ころをいふで、八事たるぬあり  
する所も何れも、さるをりにも、縣長大人の冠祥考をりて、未だ  
かきの随筆なむに、こゝをも説をも引出てよけり。

○てにをはの事ハ、終至大人の詞の玉の法、世よむるまうてより、款よむ  
とつし人も、みかよくんねて、それもゆゑ、ゆるやうなれど、終よく  
考へ合すまきハ、此集のころの事を以て、<sup>たか</sup>法ともすべし、これより  
はきて、おとにおどろのこゝをせざる事多し、それにてをはの  
さゆをよくもれざれど、款の意たゞくにんねて、ゆゑに、<sup>たか</sup>法  
玉の法を引いで、うたふ記までさゝかたり、こゝを、款をとくに  
肝要の事なれどなり、師翁又さるぬ人、この世が考などをも何

けていふなり。

○詞書れまだけけは、くふとさきゆへに、ゆゑなどを、詞のつら  
法をうりて、終至大人のさきゆへに、おつたれど、そのおほく  
結云と記て、その説を抄なく、願書とて、こは本集の詞書となすべ  
なごして、記さゆへに、けさど、さへは、本集の詞書と見合せん、  
たうりありき、ゆゑもあきばなり、さへゆゑに、きゆへに、ある所ハ、本集の  
詞書のほきふあり、法。

○作者の世系、官位乃次第なども、要をつまみて記さんとすれど、  
作者の叙を抄なく記し、公卿補任、大系圖、技業畧記など、そのほく、  
書どもに、よく、その事をも、用あるかぎり、を法と出たり、さて、次第ハ、  
まづ、此集の撰者、そのを記し、次に、そのついでに、あつて、



春上巻より次いで。巻の末に附たり。但し洞書。其書よりしていふて  
小書。程委き事ハ。このことよりおきたるをいふべき。尚  
至し。

○此注釋より用ひたるハ。為教郷の抄をきくにもし。顯昭  
法橋。契沖阿闍梨の記。かりきたるものどもをけし。古き記録。或  
る未きそれの抽活書など。は。こをき世人の著し。る書など。また。見  
す及べ。限を引出く。す。く。世。又。度。く。か。こ。か。ま。お。く。書。と。其。書。れ。を。其。他。者。の。名。を。お。と。に。も。あ。る。さ。に。  
などをもあき記し。又古今の學名をきんくの説乃。写本などふ  
ん。或もたごす傳へ。るなどは。某云と記し。な。不。回。き。説。など。の  
見す及ぶ。る。あ。く。も。同。ト。學。の。そ。う。か。ら。に。も。と。ひ。を。か。わ。り。て。そ。中。に  
考へ得たりと。あ。よ。限。を。舉。て。又。某。云。と。記。し。つ。お。の。が。考。へ。た。る。事

と。誰。も。も。思。ひ。よ。う。ぬ。へ。き。事。と。ハ。別。に。名。を。バ。記。さ。ん。さ。ん。を。中。に。し  
る。き。論。など。ハ。別。に。記。て。扱。へ。し。と。

○人々の説をあげたるハ。縣居大人と記したるハ。加茂縣主真淵大入  
鈴屋大と記したるハ。本居宣長大入師といへり。本居大平翁なら  
其他の人々の説と。初へ出せる。而も。姓名とも。小記し。つ。ぎ。へ。ハ。名。の。こ  
を。ま。る。せ。り。

○す。く。む。ひ。よ。い。ふ。盡。き。事。の。か。ぎ。り。ハ。本。行。に。記。し。今。云。と。き。出。し  
ま。く。い。ま。ゆ。か。し。き。に。よ。り。て。抽。し。る。と。ち。れ。に。む。く。れ。て。是。や。の。ま  
や。と。思。ひ。よ。う。た。る。事。など。ハ。細。書。と。し。て。別。て。ま。

○漢籍どもに。り。く。と。る。事。ハ。い。ま。で。の。れ。を。さ。る。事。の。こ。を。ま。れ。し。て。  
さ。せ。る。用。か。き。ゆ。を。バ。古。抄。な。ど。に。引。出。し。れ。る。を。も。今。は。ま。け



己かくて此凡例よきを備ふべき事ハ多しきほどさゆでさうたさされ  
きいまだまゝ所にも未とさうおきさるるとえく。已れまらん物とて  
なわさかくことぐーげはまのすれども。まやより漢字をび小  
て。一度二度見さる書などの中に。えふも是れさるふしぐも所  
まばあやまれ事もいひさるる所もあらん。そは後に  
もな考一正してん。此新抄かきけりえさるゆゑハ。師  
のけし書にんをるがめし。

文化九年四月十八日

中山義石

後撰和歌集卷第一新抄

春歌上

正月一日  
元日小。二条のきさいの宮まで。志ろきおちらぎを給をりて。

○二条后ハ。清和天皇后。贈太政大臣長良公女高子とき夫也。扶桑  
畧記。朝野群載。日本紀畧。おちらぎハ。河海抄。桐壺又未  
などよ。委く又くをり。泥。禮有大小着。衣上云。くはぎのうへ。うらぎを給なり。い  
ろぐさ。ハ。きぬ小きさ。く。長さ小袖とむと。中へらあ  
る。男女共よ。或説云。女房ハ。貴人。給するなり。云。  
又。花鳥餘情。桐壺又未。小。禮小大あり。小。禮ハ。宮一の人。或ち。  
ある。の。き。おちらぎ。きぬの上。表。裳着。そ。上。うらぎを  
給す云。く。小。うらぎハ。女房のき。おちらぎ。など。又く。をり。



ゆる雪のみけしるごほもうちきけく喜本又そゆとおどろのきぬる

○河海抄初意云。みのまろ衣ハ義カギの代カギ用とるんなり。下羈旅山屋ハ

草葉の露も志げしんみのしる衣ぬまばもきよ。又初喜巻詞源

抄云。源氏物語の某巻といふはして。巻の名のこをいへり。云。のはぎ

ぬらいとす。山伏のみのまろごほもよゆづりぬひてあへなん

あるなども。皆義の代の志なる。石原正明云。義代衣ハ雨衣アキギといふ。今

合羽カッパと云物あり。平緒小蠶を引とるものなり。雨衣といふ文字。台記

仁車記ニクルマおどふんそり。かくて。此奇コトして。白衣シロモノと云を。義代ミナシロとい

ひうけて。うちきつと。いふ詞。種をうけとるなり。さて一首の志

も。今た。いま。此雪のほとれるがめき。白き大粒をこのつきあがり。

此変格といふ物  
の事。研考へる  
る。何れとも長  
く。バ。遊考よお  
せり。

是ぞ我身の上。小。涉。惠。此。妻の来キタなり。なる。か。る。涉。惠。お。ど。よ。あ  
まん。と。ハ。思。ひ。し。う。ざ。そ。し。の。を。と。驚。れ。ぬ。る。よ。と。れ。玉。ふ。る。雪。の  
と。義。代。とい。まん。料。を。ぞ。う。時。の。さ。ゆ。お。て。も。あ。る。べ。し。云。句。つ。乃  
詞。と。末。句。の。語。か。ま。ぬ。る。よ。か。け。て。ん。ゆ。べ。し。此。奇。上。は。文。字。お。ど。の  
と。ぢ。め。く。子。ハ。終。座。大。人。詞。の。玉。の。結。ハ。変。格。と。出。さ。せ。たり。玉。の。結。ハ。二  
云。終。の。句。又。款。息。の。言。あり。て。海。の。下。ハ。可。お。又。ハ。な。ど。ハ。祥。を。加。て  
空。を。な。り。云。源。氏。家。法。い。も。せ。山。ふ。り。き。道。を。は。尋。ず。て。を。え。の。橋  
か。不。迷。ひ。を。い。ふ。は。ち。又。は。け。き。を。詞。と。い。う。も。ち。む。る。も。ち。と。有。  
ふ。と。ま。と。ひ。け。る。と。い。ふ。ま。を。せ。ハ。な  
る。是。を。て。い。づ。も。唯。一。と。あ。る。べ。し。と。あ。る。

元河内躬恒

喜そめいと空つるうらは喜日山まきえあぬ雪乃をれと見ゆ

○喜がたちとまきくと喜まふ喜日山は消滅である雪が花と見ゆ

子ゆ歌いそでかくむとハ見ゆるなとれ玉。つるうらよの。あ  
ら。と。い。ふ。詞。ハ。俗



















ざなり。そを若菜を搗よひひうけたり。初句。庭立ハ。春日の枕辞を  
見。さてはあハ。古今集。詠物歌の歌。寛平治時。后云のあ合のあ。  
友系無風。詠物歌。あたむく。時心のさくとして。載せられたり。げよ一首  
の意。詠物歌とすえたり。

子日。小まうりたる人の許。おくれ侍てきしけり。

こつ

まの世。下らんをさにもやぬ。身無。こ。菜を。は。ま。年と。こ。つ。免  
○まの世。我け。身の。ゆ。め。の。こ。な。く。ん。を。ま。でも。や。ぬ。身ハ。若菜  
を。ば。つ。ま。べ。して。な。年を。積。の。も。ど。と。ぬ。ん。を。や。るとハ。倍。よ。氣  
成。暗。ら。ぬ。と。り。子。日。上。それ。を。今。ハ。ま。き。み。ゆ。り。あ。る。り。よ。い。ひ  
う。けて。さて。若菜。を。は。ま。で。さ。く。と。た。く。う。を。せ。し。れ。たり。ん。を。や。

とよみたる。あハ。万葉。毛。まの。世。小。ん。や。ら。んと。思。よ。ど。ち。か。り。一。今  
日。ハ。くれ。ぎ。も。あ。ぬ。後。拾。遺。上。正。月。子。日。唐。よ。お。り。て。ね。さ。ど。よ。ず  
さ。び。よ。引。付。々。を。見。て。よ。さ。る。まの。世。小。出。ぬ。子。の。日。ち。と。あ。人。の  
ん。を。う。り。を。や。ふ。ど。ま。け。る。な。ど。於。あり。さて。は。あ。若菜。ハ。つ。ま。で  
と。り。よ。を。ま。き。さ。よ。い。ひ。う。け。さ。る。な。ん。と。我。友。夏。目。瓊。磨。い。一。り。  
げ。小。松。ら。ん。り。拾。遺。上。小。ま。日。世。多。く。年。ハ。つ。ま。で。と。老。さ。ぬ。物  
と。若菜。が。り。な。り。と。何。さ。な。ど。ハ。ま。き。さ。よ。い。ひ。を。せ。り。  
宇。多。院。よ。子。日。せ。んと。あ。り。け。さ。バ。式。部。心。み。こ。を。さ。き。よ。と。て。

行の親王

○式部心みこと。沙律ハ。宣明と。して。行の親王の沙兄みことあり。  
此親王の侍事。若菜拾遺おもえたり。 行の親王ハ。上総大







○寛平八字多天皇の御時の事蹟なり。御時を知らんときと  
 よむを大御時オホミトキを音便してとせらるなり。すべて天皇の御年  
 かと御の字の上より大とつし言をそへてあが先なるなり。よ  
 りて天皇の御年の外より後世ゴゴに語りおかんとつしをそへ  
 すと縣居大サトノ人云々なり。きさいのまはと形ふるも音便なり。七條后温  
 子とせえて昭宣公の女なり。契沖阿闍梨ケチウアツリ古今集云。儀草紙云。  
 仁和四年十月六日入内。菅家万葉集序。寛平五年とあれば。  
 秋合とせれよりさ記なごし。立后ハ九年なれハ初めめぐ  
 らして后の宮とハいし。縣居夫人云。此まの秋合の宮とも。新  
 撰万葉集サキウマンヤク即菅家万葉集なり。よもを此集コノ云から。よハ採りてしなり。此  
 時の奇どもことふらふしくす也。秋合ハあまむ人をたおす  
 きて。勝負を定さる。秋を測渡スルさどの傳りおともつけ。又

はくろもの水などふもあつけ。きびぐの風流をつらして。  
 抱むせ給ふなり。秋合の記と云およそしなりと古今集打種ウツタといえ  
 まら。秋まば今此イマコノ集に載せられさるも同じことなり。

よみ人あはれ

ふく風やまきもらきぬとつげつらん枝すきとれ花咲かけり  
 ○まがまらるぞとむの本よ風が告あせやいつらん枝の中コノ小径コミチて  
 ぞしサキイテ花が開出さるよとけり。まらきぬハまきまぬなり。きて。お  
 ら。廣くま咲むをきいていふあはれ。後世よ花といへむ。梅ぞとん  
 ゆるとハいはまら。古今集は集とも小梅の宮ハ大々梅とよえり。  
 又花とよみさるよ。詞書小梅とおとされり。  
 志まらむかりよ。や万やへことふはきてまらうけ。ほどふやど



まて侍る人の家のむすえを思ひつけて侍ることもやむごと  
ぬき事ふりてよろうのむすにたりある妻親のともふつ  
けい。

○あつきては信ヨウジ用事ありてとりよおなだ公私の手  
えざをな今いを伺よえ やむごとぬきなやざりふーぐき  
さだめさだめ さういひてなやざりふーぐき がーとナキヤムコト 同だくてナキヤムコト  
さき人をりよなやざりふーぐき さきより申さるなりと  
経念大人いされたり。

みつ

春日野小あつわわうぬを足してうりん張つてい思ひやうか  
○かの思ひつけるむすえを妻親よぬき へるの。 春日野を

大和國なり。 妻親あ川の山べの松をうりんをせむ  
思ひやうぬ。 さくはちも志の松小入べきなり。

かき小なる男姑をせふをすけうの。庭の本姑のむすけ  
子枝をくすき一々。

○かき小なる男とへ。此他者と別れては他者の許小通ひす  
たが今を絶するなり。すべて男の女の許へをすむと  
めく男の家へ女をむりいよとをたり。又いよ一を今世の おくすハをさく なくて女の許へ  
男の思ひなるなり。お侍言など小も多く思ふるがめ  
こそすけい。ハを男姑思ひ来て いつも居る。下の庭の  
木の枯る枝を折てはちをつけてやりたるなり。

善覧王母

とえぬ。あの免を足ても縁をぬく枯り一枝の妻をさるぬ



○今かく喜よなりて、かく結茅の雪を足ても、かくの如く一度枯と  
ふ本と喜よなりて、終に枯果なり。我は離る人も、此枯  
枝の如く、二度も折る給ふ事いあはれと思ひて、喜をねき侍ると  
りなり。

女のみげうよまかり出て侍々に、めづりきかどハ、これの  
ま相いひあはれ侍を、ほどもなく侍よりよあひ侍よくれだ。  
むけきのついでらむかりふいひつら侍を。

○男女の言よりけり、又おあるなどいふら、大うを契  
かきよすなれども、はあよ、これのま相いひなごい一系  
と、だに戯をねどいひつける女も、女の新入たるに  
あはれ、かどもねく一人よあひ侍とある、方浦ことお契かき

らひーことねまばなり。

よみ人あはれ

い川の言より喜よなりて、喜日野乃喜に、とけぬ冬とえーまふ

○喜日野の言も、喜よなりて、喜日野乃喜に、とけぬ冬とえーまふ  
と、よ時よなりて、喜が立一りぞといひて、喜よなりたりとハ、  
一人の男よ喜よを、をりなり。此句のとけぬといひ、詞を、秋の葉の  
小同く、喜日野、俗言よいま、ヤ  
ボナ、ウチ氣ナ、などいひよを。

題云くば

南院左大臣

なみざりに、をりつら、を梅乃花まきり、小我やあはれも、を免てん  
○喜あきり、かあり、下よ梅の花よをねど、あんなわきも、まがとがむむ  
からの春も、くも志免とある、をも引合せ、んねべし。 末句ハ、深



























まんさやうしてさるまきにとりよきなり。古今<sup>上</sup>梅の花たちよ  
をかりあやう人のとがむる香もあまける。などをもしよ  
し。まよとくをく離るるをいひ詞なり。意の上にてよそ  
る人よなり。わぎもこを。吾妹子の約るなり。仁賢紀の古  
者不言兄弟長幼女以男称兄男以女称妹と有り。上つ代  
代まで通する事あり。神代紀を初め源氏物語なども。妹を  
いひしと。いひし事あり。然ればとせハ。男女といまんが  
めく形ををせよなりても。また中をのりめくハなり。さ  
なり。此本句のまこと又もその祥をさきをあやぶて。と  
てやあしん。さ有りてさるううぬよ。と。いひま  
此例は遠るもすれハ。おまど。とはいとまきなる事なり。あ  
ましくハ。玉珠三の巻十九の初。五の巻。三枚を。見てんねべし。

素性法師

梅をこれどがまぬ我袖すみほひのり<sup>はうりき</sup>勢あづとをそ

○あづとせんとして。梅の花をまぢつれど。さうくと袖も敷か。まて。  
なれと袖ももす。はなりゆくを。こがまぬといまれ。うとす由。  
こそ袖もるが。めき詞なり。さて。せえてハ。我袖も白ひなりともうつ  
せ。そ香をさよあづとせんとして。みわひは。白ひ香なりと。為  
家々の抄も。え。うりと。季吟は。ハ記されとせど。今ある。為家抄  
小をえ。む。されど。さハ。遠る。竹川巻<sup>九条</sup>を。いひと。あ。お。げ。い。と。あ  
う。ね。え。う。ま。さ。ほ。して。う。ち。あ。ま。ひ。え。る。ま。わ。ひ。う。ね。ど。よ。の  
者。な。ら。ば。さ。う。と。え。て。ま。わ。ひ。香。ハ。ま。わ。ひ。香。を。い。ひ。と。後。風。入。い  
ま。ね。う。り。ま。よ。な。ひ。う。と。い。ひ。詞。いと。め。げ。ら。き。ゆ。あ。ま。ん。ゆ。わ。き  
あ。ち。す。え。ま。ど。さ。う。と。て。家。集。の。方。ま。て。ハ。あ。ぢ。が。い。く。く。木。と。う。べ











且万葉巻八の吾宅巻五の和止幣又和我覇とも書れど二が  
へとよさんも代ぶ一一首のまはりきく一書ハ清れども然  
ちれども事なれど學のわくとつなり万葉巻十のよふ言らふ  
まつくまうすふは川やたをそまよけるうもとつり

谷さむみいさすそぬ學乃なくく急こり人乃すさ免勞

○二つのみもどハ若が意さよ情赤が若さよとつまきぬ山言風

涙を早ミなど此歌のみと但下きふ何な月ありこふをいとこ

らすミとあることれはさすハありこよ委くりあべし

すさめぬもる物おていも目にもけぬといもんがぬくはく

物なろバ耳おもと免ぬといもんがぬく信さよ貪着せぬといよ

を貴覧せぬまなり古今上妻山言も人もすさめぬ極むつくれ

びそ家兄もやさん同難上天あふれたら下守老ぬまど約もすさ

免がかる人をおしなど皆同ト一一首のまハ若が意さよ妻い來て

もいさぶ葉立ゆぎてなく聲がとまぬさふ信ありて耳にと免て

學が情よと貴覧する人も好しとなるべし又也よも上

あふがめく用談の例とさう末句は新息のまありて人のすさ免

ぬよといよよをまやうなり物るとれたた學の上をよみたるあ

も思もれぬもハ意あなどおて我がいまづ人からくにも何

ぬ身ゆお小赤りよすぬどを人の耳おもと免さるよ也我身とひけ

くまぬどおと何とト師云件の説いてよくすえられど又い

さう馬あよこ急こりことつふを古今集のまもど花もよわそ

ぬ山屋ハおうがる孫よ學がぬくと何ると合せて考ふるよ學のこ

急のいまづんよくむやうにまなうすて倍よ谷さむりといひて















をいへ子なり。古今夏<sup>夏</sup>思ひ出ると記の山乃布とくぎんうらとを  
 なるのふり出てぞわく。又昔よよみたる。晴吟日記<sup>上巻</sup>引くも縁  
 ぞ身とくぐひまのふり出てゆくとゆけ神ふも山も。わどわあ  
 だ。一首のまは。梅忌の霞ふつと。考をあげて考わくとつひ  
 て。さば。昔も。思ひ出ると。みでなくともえゆ。とりよをふく免と。  
 なり。古今<sup>下</sup>小<sup>考</sup>。わく。わき考をもなく。わうぐひまはあといのこ  
 ち。花なうわく。なとある。とも引合せて思ふべし。三句ハ。四句  
 ふり出てといはん料。ま。ま。西のよ。松のやうよおきて。さて。ま。あ。ま  
 急のうら。後。ま。ま。に。む。う。せ。た。る。なり。  
 か。ま。ひ。ま。ま。付。た。る。人。の。家。の。ま。あ。る。柳。を。思。ひ。や。り。て。

みつゝ

いもがいへ乃もい入りたる。秋青柳。尔今やなくらん。昔はく思  
 ○僻梅抄云。まひ入まざる。門のつら口をよめると。まゆ。ま。ま。於。屋。交  
 古事紀傳<sup>十二</sup>。云。後撰集云。堀川百首にも。葉の屋の波比理の屋小  
 巻<sup>四十八</sup>系<sup>二</sup>。云。後撰集云。堀川百首にも。葉の屋の波比理の屋小  
 ねく加火乃煙う。さ。記。夏。た。夕。れ。そ。う。を。思。ふ。ま。門。より。舍。屋。内。に  
 入。ま。で。お。る。の。庭。を。波。比。入。と。云。う。なり。古。言。な。ま。ま。波。比。入。と。ハ。多  
 だ。歩。入。ふ。て。今。世。の。言。小。も。入。を。波。比。流。と。云。う。れ。な。り。波。布。と。い。さ  
 さ。う。お。間。の。ね。を。歩。き。行。く。と。な。り。故。源。氏。物語。な。し。小。家。内。な。し。わ。て。  
 彼。より。思。出。る。と。い。ふ。れ。ど。を。波。比。渡。な。ど。多。く。云。う。ま。ま。此。波。比。入。ハ。  
 古。物。に。べき。お。ま。り。と。大。庭。と。云。今。世。ハ。玄。關。前。白。洲。な。ど。い。ふ。わ。り  
 不。な。れ。ど。云。と。い。と。毒。く。い。ま。れ。り。ま。ま。お。て。わ。り。う。なり。於。夫。本  
 集<sup>三</sup>小。も。つ。ま。と。う。る。人。ご。に。も。わ。り。我。石。の。ま。ひ。り。の。柳。下。け。へ。ど



















